デクー先生行狀記

デクー先生行状記

山村仁六 著

黎明書房版

著者略歴

本名　榎本　久　　大正5年5月6日神奈川県津久井郡相模湖町に生れる。神奈川県師範学校卒同郡下にて教諭，校長職を歴任する。現在，指導主事，相模原市教育委員会に勤務する。視聴覚教育に関する論文，その他教育雑記がある。
現住所　神奈川県相模原市小山117

デクー先生行状記

昭和32年6月10日　初版印刷
昭和32年6月15日　初版発行

定価 ¥220

著者　山村仁六
発行者　力富阡蔵
印刷者　小栗稔也
（菱源印刷工業株式会社）

発行所　株式会社　黎明書房
名古屋・中区大池町6ノ5
東京・文京区新諏訪町13
振替名古屋59001番

無断転載上演上映を禁ず

序

個人より団体の権威が、大手を振って通る国、地方より中央、民より官というような、価値判断の標準が、迷信となっているこの姿を、とり除くために教育が負う責任は重い。

このごろの世の中を見て、誰もが気付く事実は、あらゆる面にわたって、個というものが、否認されつつあることだろう。

個性が尊重されるが如く、いいはやされていながらも、事実は独自性とか、特殊性とか、創造性というものが、消滅しつつあるということは、嘆かわしいことである。衣類にしても、料理にしても、また、都会にしても、田舎にしても、一様に、類型化してゆく姿は、何とも、味気ない思いがしてたまらない。ちなみに旅に出てみたまえ。どこへ行っても、同じような土産物を並べ、同じような食物をくわせる。そしてそこには、同じような人の群が、同じような考え方で、行動している。

田園の教育が、田園生活の中に育つ、こどもたちを対象として考えられるべきである、その環境が、清純なこどもたちの育つ、暖かい巣でなければならないのに、そこには都会の商人が、事業家がはびこり、個性のない流行の波が、山間田野、老若男女を、すさまじい勢で押し流しているばかりである。

教育また、この波間に、没せんとしつつあるのではなかろうか。

山村のきびしい現実が、どんなものか、その現実の中のこどもはいかに生活しているのか、それをみつめ、その上に立って教育をどのように進めるべきかを考え、自らその道を切り開いてきた、その素朴な抵抗こそ、わが榎本君が歩んできた道である。

私は榎本君が、長年にわたり、山村の小さな学校の、校長として、いかにこどもをみ、いかにこどもとその母親たちを愛してきたかを、よく知っている。山のこどもは、山のこどもとして、その野性さや、素朴さを尊び、たいせつにしながら、力強い教育実践を進められたのである。その大いなる記録の中の一片を、物語るものが本書であるといえる。

本書をみると、誰もが、幼少のころを思い起し、心の故里をたずねあてたような、懐しみを感じ、心をあたためられると思う。ことに教師の方や、教育に関心をもたれる、父母の方々が、

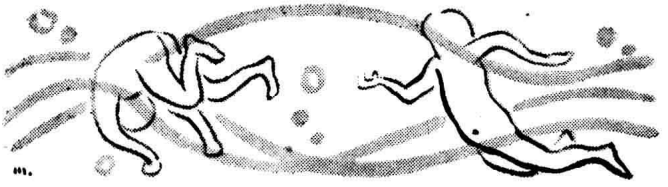
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本書を読まれることによって、これからの教育が、向うべき一つの焦点を、発見され、あるいは、新たな方法を展開されることであろう。

榎本君の志してこられた、尊い道に対して敬意を表しつつ、広く本書を、おすすめしたいのである。

昭和三十二年三月

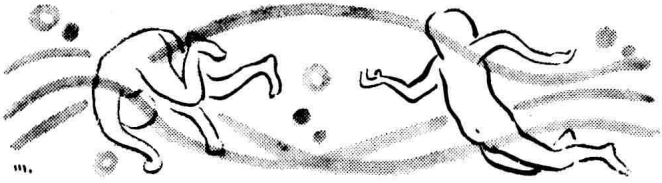
神奈川県教育委員　鈴木憲一



デク一先生行状記・もくじ

第1話　珍名〝デク一先生〟の由来　八
第2話　白雲やただ今花にめぐりあい　一八
第3話　おふくろさんとテープレコーダー　二七
第4話　金太峠の星まつり　三五
第5話　そろり稲荷の大喧嘩　四三
第6話　部落が消える日　五一
第7話　金太の見た〝水の子〟の夢　六七
第8話　湖畔にねむの花咲くころ　七五
第9話　金太の雲がくれ　八二

第10話　なべさんと馬ぐそだんご　八九
第11話　コスモス学園のこと（一）　九八
第12話　コスモス学園のこと（二）　一〇七
第13話　雪隠づめになるデク一先生　一一五
第14話　木のぼり金太とコスモス先生　一二五
第15話　ラジオと金太と柏の葉　一三三
第16話　デク一先生得意の五笑（M）教育とは　一四四
第17話　楽児王（ラジオ）と会長さんの遺言　一五三
第18話　デク一先生世話女房をもらう　一六二
第19話　力さんと公民館づくり　一七四
第20話　デク一先生赤くなったり青くなったり　一八二
第21話　日本一の名付親　一九三



第22話　麦とこどもと合奏団　二〇三
第23話　NATOKOさんとこどもたち　二一二
第24話　送られつ送りつ果は木曽の秋　二二〇
第25話　雨ニモマケルデク一先生　二二八
第26話　デク一先生ドリーム・ランドへ行く　二三六

さしえ　藪野正雄

デク一先生行状記

第1話　珍名〝デク一先生〟の由来

花の四月十三日。

わがデク一先生にとって、生涯忘れえない日となった。

そのいきさつには、実に痛快な話がある。

今を盛りとさくらの花が、咲き満ちこぼれている。杉皮ぶきの小さな学校に、職を奉じた、めでたい日であり、新しい出発の門出の時でもある。さらに〝珍名デク一先生〟の命名の日でもあったのである。

この日デク一先生は、役所で辞令をいただいた。そこで新聞記者の力さんに会う。力さんは、これからデク一先生が、勤める学校の、村に住む、愛すべき熱血の人、快男子である。デク一先生は、かねてから、その風格が好きで、親しい間がらであった。

そこで力さんは、

「先生、早速で恐れ入りますが、知恵をかしてもらいたい。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

という。何事かと思うと、時あたかも、国をあげての、選挙月であった。力さんの尊敬する候補者のために、応援してもらいたいというのであった。デク一先生は、信頼する力さんの言うことだから、深くも考えないで、簡単に、よかろうと承知して、力さんと共に、トラックに乗せられてしまった。

これから、すぐに、力さんの地元へ行こうということになった。

デク一先生としては、これから校長さんとして勤める村への第一歩であった。が、このような、任務をもって、乗り込もうとは、けさまで、思ってもみないことであった。

幸にして、山の村は、年に一度の、楽しい、地蔵まつりで、村中、わきかえっている。地蔵の森は山の上にある。のどかに鳴る、太鼓のあたりらしい。曲折する山道を、ゆき交う村人の姿が、たえ間ない。里の広場では、老いも若きも、おたのしみの村芝居が、かかり、よしずばりの舞台の前は、近隣の村々から、集まった、見物衆で、ごったがえしている。時もよし、所もよし、デク一先生のトラックは、この会場へのり着けたのである。

おでん屋の前に、群がるこどもたち、鳴風船のあわれっぽい音、スピーカーから流れる時節外れの流行歌が、むやみとボリュームをあげる。まだ日はだいぶ高い。力さんに案内されて、デク一先生は、楽屋へはいった。

デク一先生は、どうなることかと、少々不安になる。
折よく、幕はしまって、今、中休みであった。その間、力さんは、幾人かの人にデク一先生を引合わせる。
拍子木が、チャキッと鳴る、見物席が、ようやく静まってくる。観客は、期待に胸おどらせて、開幕をまっている。拡声器の音楽が止んだ。どっと拍手があがる。と、
「おまたせしました。ただ今から、とび入りプロとして、伊出先生をご紹介いたします。ではどうぞ。」
見物席は、思いのほかのことに、失望の色を浮べながらも、伊出先生とは、何者だろうと、好奇の目を舞台に注いでいる。ベルの音と共に、風をはらんで幕が、開かれた。嵐のような拍手がなる。力さんが得意のハーモニカを吹きながら出てくるその後から、伊出先生が登場する。力さんは、中ほどのマイクの前に立って、一礼して、口を開いた。
「諸君、ただいま、これにお見えの先生は、わが村の学校へ、新しくおいでになった、伊出久一、イデク一、先生です。（場内に笑声がおこる）お集りの諸君に、一言、ごあいさつをいただきたいと思います、ではどうぞ。」
場内は、一瞬、しんとなって、この風変りなデク一先生の姿に、観衆の目は一斉に注がれた。

「みなさん、きょうはおまつりで、誠にめでたいことです。私が、ただ今、ご紹介いただきました……」

この時客席から――

「デク一先生」

と声がかかる。

「その伊出久一です、どうか、ごひいきの程お願いします。」

また拍手がおこる。

「みなさん、私は、デクノ坊教育をしたいと願っています。」

ワーッとバクハツする笑い声、

「やっぱりデク一先生だ、しっかりやれ。」

とヤジがとんでくる。

「みなさん、私は、ほんとうのことというのです。今この国に、一番ほしい人間はデクノ坊のように、腹の底からの正直者で、底抜け気のいい人間です。それがデクノ坊です。そういう人を育てることに、私は生涯をささげる決心です。」

「わかった。デク先生、しっかりたのむ。」

「もういい、わかった、わかった。OK」
「ところで、みなさん、今少しきいて下さい。今回の選挙にも、デクノ坊を、出したいです。今の議員連中は、ずるすぎると思うでしょう。すきを見ては、自腹をふくらすことばかり考えてる。だから、こんどこそ、バカ正直の、底抜け心のいい、デク候補に、清い明るい一票をたのみます。そのデク候補の名は、――名は、ええと、はてな、ちょっと……。」
と、力さんを振り返る。
客席は、またまた騒然とわきかえる。
「演説はもうやめろ。」
とやじがくる。
「その名は、デク一先生だ。」
ついに客席の騒音は、静まらず、伊出先生は、全く立往生する。
「みなさん、みなさん、静かにして下さい。」
と連呼するけれど、その声はかき消されてしまう。力さんは見かねて、伊出先生をうながし、幕となる。客席はやっとなりをひそめたのである。
これが、デク一先生という、珍名の起りである。この日から、村中、誰ひとり、伊出先生と呼

ぶ者はない。こどもたちは、デク一先生と、それが本名であると思ってしまったのである。そして、この面白い名前に、子供たちは、大変親しみを感じたようであった。

ともあれ、こうして、デク一先生は、この山の村の学校の校長さんとして、おさまったのである。デク一先生は、年の頃は、四十五、六にもなろうと見えるのに、家族とては、ひとりもない。ひとりぼっちのやもめぐらしである。学校の住宅に、古ぼけた、トランク一つをかついできて、住み込んだのである。いつもよれよれにつかれた服を着て、かみの毛は、ぼうぼうとして、体はばかに大きい。誠に、風変りな先生である。

その日から、四、五日たった。吹雪のように花が散りしきる日曜日、珍らしく晴れあがって、いやが上にも、なごやかな花日和であった。

春眠を十分たのしんで、九時ごろ朝食をしていると、街道の方から、ワイト、ワイト、こどもらの、かん高い声が、どうやら、学校へ上ってくるようである。デク一先生、

「おいでなさったな、ちび助ども。」

とひとりごといいながら、急いで飯をかきこんだ。こどもらは、もう、運動場の、桜の吹雪の下に陣取って、声をそろえて

「デク一先生、おはようさん、おはようさん。」

デク一先生、ガラス戸あけて、外に出た。
「おやおや、こりゃあ、何んだ。」
デク一先生が、不審に思うのも道理。
桜大樹の花かげに、並んで立ったこどもらは、手に手に、真赤な旗をもち、盛んに打ち振って、
「デク一先生、バンザーイ、万才。」
と気勢をあげているのである。その間にも、降る降る、斜に、巻きながら、花の吹雪が、こどもらに、赤旗に、降りかかり、散りかかる。その風情に、みとれるデク一先生は、おとぎの国に遊ぶ心地。楽しく、うれしく、デク一先生の、ゆくてを、祝福するもののように感じたのである。こどもらに近よって、ひとりずつ、いがぐり頭を、なぜまわす。こどもらの名前は、まだ知らない。
「いいこたちだな、こっちから、名のりをあげろ。」
と、そのことばを、とるように、
「福次、太一、陽助、照吉、健二、ヒメコ、三吉。」
へいたいのように、テキパキ、名前をいう。
「よーし、先生が、呼んでみるぞ、いいか、元気よくハイとやるんだ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com